

# 「昭和天皇」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

## 1. 天皇陛下の大御心

東日本大震災から 1 周年を迎えた平成 24（2012）年 3 月 11 日、天皇陛下は東京で行われた追悼式典に、皇后陛下とともに出席されました。

御年 78 歳（当時）の天皇陛下は、同年 2 月 18 日に心臓の冠動脈のバイパス手術をお受けになり、3 月 4 日に退院されたばかりでした。

大手術をご経験されたばかりのお身体でありながら、被災地に思いを寄せられ、式典へのご出席を強く望まれておられた陛下。そのお姿に、私たち国民の多くが感動するとともに、胸が一杯になりました。

「平和と安寧(あんねい)への祈り」をお続けになられる天皇陛下の大御心(おおみこころ)は、被災地のみならず、先の大東亜戦争における数多くの戦没者に対しても、強いご慰霊のご意思をお持ちになっておられることを、皆さんはご存知でしょうか。

天皇陛下は、沖縄戦終結の日（6 月 23 日）と広島と長崎の原爆の日（8 月 6 日・9 日）、そして終戦の日（8 月 15 日）を「日本人が忘れてはならない日」とされておられ、沖縄の伝統歌謡である「琉歌(りゅうか)」を以前よりお歌いになっておられるほか、戦没者のご慰霊にも積極的に向かわれておられます。

天皇・皇后両陛下は、平成 5（1993）年 4 月に全国植樹祭へのご臨席で、ご即位後に初めて沖縄をご訪問された後、平成 6（1994）年 2 月には硫黄島(いおうとう)で、戦後 50 年に当たる平成 7（1995）年 7 月から 8 月にかけては長崎・広島・沖縄・東京で、それぞれ戦没者をご慰霊されました。

また、戦後 60 年の節目に当たる平成 17（2005）年 6 月には、サイパンを慰霊訪問されましたが、いわゆる「バンザイクリフ」までお出ましになられた際には、岸壁まで歩まれた後に、多くの方々が身を投げた海に向かわれ、黙祷を捧げられました。

さらには、戦後 70 年の直前にあたる平成 26（2014）年には、6 月に沖縄、10 月に長崎、12 月に広島と次々にご訪問され、70 年の節目となった平成 27（2015）年 4 月には、日米双方で約 12,000 人が犠牲となった、パラオ共和国のペリリュー島で戦没者の霊を慰められました。なお、両陛下がペリリュー島をご訪問された 4 月 9 日は「天皇皇后両陛下ご訪問の日」として、ペリリュー州の祝

日とされています。

そして、平成 28 (2016) 年 1 月には、大東亜戦争において約 518,000 人もの日本兵が犠牲となったフィリピンを、皇太子時代以来 54 年ぶりに、両陛下がご訪問されました。フィリピンでのご慰霊は両陛下の悲願だったとされ、両陛下の強いご意向により、ようやく実現したとのことでした。

また、自然災害が相次ぐ我が国において、両陛下は度々被災地をご訪問になり、犠牲者を悼(いた)まれるとともに、被災者をお慰めになり、救援活動に関係する人々を励まされておられます。

平成 7 (1995) 年 1 月 17 日に発生し、6,400 人を超える死者を数えた阪神・淡路大震災が起きた際には、震災からわずか半月後の 1 月 31 日に、両陛下の強いご希望で、被災地の神戸にお入りになりました。

そして、地震と火災のダブルパンチによって壊滅的な被害を受けた、神戸市長田区の菅原市場(すがはらいちば)の変わり果てた様子をご覧になられた皇后陛下は、当日の朝に皇居のお庭でご自身が摘(つ)み取られた 17 輪(りん)の水仙(すいせん)を、瓦礫(がれき)のうえにそっと献花されました。

春の訪れとともに咲きはじめる水仙は、海外において「希望の象徴の花」とされていることから、皇后陛下の「困難に負けずに希望を持って復興してほしい」という御心(みこころ)が込められているのではないかと拝察します。

なお、皇后陛下が献花なされた水仙は、そのままの姿で永久保存され、神戸市の布引(ぬのびき)ハーブ園に展示されています。また、復興を遂げた菅原地区では、皇后陛下が献花された瓦礫の場所が「すがはらすいせん公園」として整備され、入口近くには記念プレートが設置されました。

先述した東日本大震災直後の平成 23 (2011) 年 3 月 16 日、天皇陛下はビデオを通じて日本国民に対するお言葉を発表されました。天皇陛下が全国民に直接お言葉を発表されるのは、昭和 20 (1945) 年の終戦時における、昭和天皇の玉音(ぎょくおん)放送以来の、極めて異例のことでした。

ちなみに陛下は、ビデオメッセージをマスコミなどが発表する際に「発表の途中で緊急の報道を必要とする場合は、中断してかまいません」とのご意向を示されたそうです。

ビデオメッセージの発表後、天皇・皇后両陛下は、3 月 30 日の東京都足立区の避難所お見舞いを皮切りに、東京・千葉・埼玉の各避難所や、茨城・宮城・岩手・福島の被災地などを、被災者お見舞いのため各地を行幸(ぎょうこう、天皇陛下が外出されること)されました。

また、原発事故の影響で、関東地方で計画停電が行われた際には、皇居がある千代田区が計画停電の対象外になっているにもかかわらず、第 1 グループと同じ時間に電源を落として、国民と苦労を分かち合われたそうです。

今上(きんじょう)陛下のみならず、歴代の天皇陛下は、我が国と国民の平和と安寧をひたすら願われて

こられました。そして、その願いは今上陛下の父君であられる昭和天皇も同じであり、我が国の歴史に大きな足跡を残されました。

足かけ 64 年にも及ぶ、我が国最長の元号である昭和。しかし、その道りは決して平坦ではなく、まさに「激動の昭和」の別名どおりの苦難の連続であり、なかでも最大の試練だったのが、昭和 20 (1945) 年に終戦を迎えた大東亜戦争でした。

終戦後、我が国では戦争に対する責任問題が次第に叫ばれるようになりましたが、最大の責任者として昭和天皇の名を挙げる人々も少なくありません。しかし、これは本当のことなのでしょうか。

当時の我が国で施行されていた大日本帝国憲法 (= 明治憲法) では立憲君主制とされており、大東亜戦争においても、内閣が決議したことを昭和天皇が事務的に承認されただけでした。

こうした歴史的事実からすれば、昭和天皇ご自身に政治的な戦争責任があるとは断定できないのが現実でしょう。しかし、政治的や手続的な問題とは関係なく、昭和天皇は戦争に対する道義的な責任をずっと感じておられました。だからこそ、我が国は憲法の概念を超越した陛下の「ご聖断」によって、戦争を終わらせることができたのです。

今回の講座において、我が国の歴史に大きな足跡を残された昭和天皇のご生涯をたどることで、輝かしい日本国の歴史を、未来へとつなぐ一助となれればと思っております。

昭和天皇は、明治 34 (1901) 年 4 月 29 日に、当時の皇太子である嘉仁親王(よしひとしんのう、後の大正天皇)の第一皇子としてお生まれになりました。祖父である明治天皇にとっても初孫にあたる男子のご誕生は、20 世紀の幕開けを飾るにふさわしい慶事でもありました。

お七夜(しちや)にあたり、端午(たんご)の節句の日でもあった同年 5 月 5 日には、ご称号を迪宮(みちのみや)、御名を裕仁(ひろひと)と命名されました。「ゆたかに広く、おおらかな心で国を治め、人類の幸せのために尽くすことができるように」という願いを込めて、明治天皇がお名付けになったといわれています。

裕仁親王はお健やかに成長され、幼年期の頃から厳格な明治天皇の御前でも決してひるまれることなく、また伊藤博文(いとうひろぶみ)などの明治の元勳が挨拶(あいさつ)に参上しても、物怖(ものお)じなさらず堂々と応対されました。

未来の天皇陛下にふさわしいそのお姿に、親王が幼い頃からお世話をしてきた侍女の足立たかひは、涙がこぼれそうになったと後に語っています。なお、彼女の名は、後に思わぬところで私たちの目に留まることとなります。

明治 41 (1908) 年、裕仁親王が学習院初等科へご入学されると、陸軍大将の乃木希典(のぎまれすけ)が学習院院長として迎えられました。雨の日でも馬車に乗らずにコートを着て学校へ向かい、雪が降る寒い日は外に出て駆け回ることによって体を温める。乃木将軍は、裕仁親王に将来の天皇としての帝

王学を厳格に教育するとともに、どんな小さなことでも大切だと思うことは丁寧に教え、親王も素直にそれを守られました。

明治 45 (1912) 年 7 月 30 日、裕仁親王が 11 歳の時に祖父の明治天皇が崩御(ほうぎょ)され、その大葬の日であった 9 月 13 日に、乃木将軍は妻とともに殉死しましたが、その数日前に、将軍は裕仁親王に山鹿素行(やまがそこう)の名著である「中朝事実(ちゅうちょうじつ)」を差し上げ、素晴らしい本であるから熟読されるように、と勧めました。

いつもと違い、ただならぬ心配が漂(ただよ)う乃木将軍の様子に、裕仁親王は「院長閣下 (=乃木将軍) はどこかへ行かれるのですか？」と聞かれたそうです。後で将軍の殉死をお知りになり、祖父の明治天皇に続いて、大切な院長閣下まで失われた親王のお悲しみは、たとえようもないほど深かったに違いありません。

しかしながら、父君の大正天皇が即位され、ご自身は皇太子になられた裕仁親王は、その責任の重さをかみしめられながら、お悲しみを乗り越えられて勉学に励まれ、やがて成人された皇太子殿下は、大正 10 (1921) 年に、ご病弱であられた大正天皇に代わって、20 歳で摂政になられました。

大正 12 (1923) 年 9 月 1 日に関東大震災が発生して、東京や横浜などで多数の人々が亡くなるとともに、街は焼け野原となってしまいました。ご無事であられた摂政宮は、震災の悪夢が覚めやらない 13 日に、被害の大きかった上野公園や日本橋をまわられ、被災者を励まされました。

年が明けた大正 13 (1924) 年、摂政宮は以前より婚約されていた良子女王(ながこじょおう、後の香淳皇后 =こうじゅんこうごう)とのご結婚式を行われ、震災の悪夢に打ちひしがれていた国民がこぞって喜ぶ慶事となりました。

しかし、禍福(かふく)はあざなえる縄のごとし。大正 15 (1926) 年 12 月 25 日、かねてより療養されておられた大正天皇が、47 歳の若さで崩御されました。深いお悲しみのなか、皇太子裕仁親王は直ちに踐祚(せんそ、皇位の継承のこと)され、第 124 代天皇となりました。

同時に元号も「昭和」と改められました。昭和の由来は、中国最古の歴史書である書経(しよきょう)の「百姓昭明(ひやくせいしやうめい)・協和萬邦(きやうわばんぱう)」であり、国民の平和と世界の繁栄への願いが込められていました。なお、江戸時代 (1764 年、田沼時代の頃) に同じ出典から「明和」という元号が制定されています。

昭和 3 (1928) 年 11 月 10 日、新しい時代にふさわしく、京都御所で即位の礼が華やかに行われましたが、その一方で昭和 2 (1927) 年には金融恐慌(きんゆうきやうこう)が起きるなど、我が国全体に不穏(ふおん)な空気が漂(ただよ)いつつありました。

そして昭和 4 (1929) 年には、昭和天皇にとって最初の大きな試練が訪れるのです。

## 2. 立憲君主制の重み

昭和3（1928）年6月4日、満州の軍閥政治家の張作霖（ちょうさくりん）が乗った列車が、奉天（現在の瀋陽＝しんよう）付近で爆破され、暗殺されるという事件が起きました。これを張作霖爆殺事件といいます。

事件発生に驚かれた昭和天皇は、直ちに当時の内閣総理大臣であった田中義一（たなかぎいち）に、関係者の厳正な処分と軍の綱紀粛正（こうきしゅくせい）を命じられました。

しかし、田中首相は陸軍などの強い反対を受けて、関係者を処罰することができず、結局事件をうやむやにしたうえで、翌昭和4（1929）年6月27日に調査結果を昭和天皇に上奏（じょうそう、天皇に意見や事情などを申し上げること）しました。

まだ28歳とお若かった昭和天皇のお顔の色がにわかに変わり、お怒りの声を発せられました。

「この前の約束と話が違うではないか！」

昭和天皇は、常に我が国の繁栄と国民の安寧を願われていました。それが天皇としての当然の責務と思われておられたのです。そして、我が国が平和であるためには、世界の国々とも友好を深めることが何よりも大切であるとお考えでした。

そのためには軍隊であっても当然規則を守らねばならないはずなのに、大きな事件を起こしたばかりか、その結果をうやむやにしようとする田中首相の報告を、昭和天皇はお許しになられなかったのです。そして、そのお怒りが、さらなるお言葉を生み出してしまいました。

「辞表を出してはどうか」。

昭和天皇から直接辞職を迫られた田中首相は大きなショックを受けて、5日後の7月2日に内閣を総辞職すると、それから3ヵ月も経たない同年9月29日に死亡してしまいました。

後に田中義一の死去をお知りになった昭和天皇は、お心の中で「しまった」と思われました。なぜなら、陛下が行われたことは、結果的に大日本帝国憲法で定められた立憲君主制に反することだったからです。

いくら曖昧（あいまい）な報告だったからとはいえ、昭和天皇が田中首相に直接辞職を迫られたことは「天皇による政治への介入」に他なりませんでした。これは「国王は君臨すれども統治せず」とする立憲君主制の原則を明らかに破ることなのです。

まして、ご自身の発せられた言葉が内閣を総辞職させ、首相を死に追いやったかもしれないという結果が、日頃から責任感のお強かった昭和天皇に大きな影響をもたらすことになりました。

この事件以降、昭和天皇はご自身に誓われました。

「今後、内閣が私に上奏することは、たとえ自分の考えと反対の意見であったとしても、裁可を与えることにしよう」。

昭和天皇にとっては、立憲君主というご自身のお立場をお考えになってのご決断でしたが、時代は統帥権干犯(とうすいけんかんぱん)に関する問題が深刻化しており、陛下のご決断は、結果として軍部の様々な行動を黙認されることにつながってしまいました。

これ以降、昭和天皇は、内閣とは無関係に、ご自身で政治的な問題に決断されることが2回ありました。そして、その2回ともが、我が国の運命を大きく変えることになるのです。

昭和8(1933)年12月23日に、ご待望の男児である明仁親王(あきひとしんのう、現在の今上天皇)のご誕生という慶事もありましたが、1回目のご決断の機会は、その2年2ヵ月後に起きた大事件の際に訪れました。

昭和4(1929)年に起きた世界恐慌の影響を受けて、アメリカやイギリスなどの広大な領土や植民地を持つ欧米諸国は、自国の経済を守る目的で他国からの輸用品に多額の関税をかけるという、いわゆるブロック経済の政策を進めました。

国内で自給自足できる国ならそれで良いかもしれませんが。しかし、我が国のように資源に乏しく外国との貿易に頼っている国家にとって、ブロック経済は深刻な打撃になりました。その一方で、建国されてから日の浅い共産主義国のソビエト連邦(現在のロシア)による政策は、貧困の生活にあえぐ、特に優秀な軍部の青年将校にとっては魅力的に映りました。

かくして、軍部では天皇を中心とする社会主義思想が主流となり、地主や資本家などの富裕層や、彼らと癒着(ゆちゃく)していると思われた政党政治家を激しく憎むようになりました。先に紹介した張作霖爆殺事件や統帥権干犯の問題、あるいは昭和7(1932)年に首相の犬養毅(いぬかいつよし)が暗殺された五・一五事件も、こうした流れの中で起きたのです。

我が国での社会主義思想は、やがて陸軍における皇道派(こうどうは)と統制派(とうせいは)との派閥争いをもたらし、昭和11(1936)年2月26日の未明には、皇道派の青年将校らが首相の岡田啓介(おかだけいすけ)や大蔵大臣の高橋是清(たかはしこれきよ)、内大臣の斎藤実(さいとうまこと)、そして侍従長(じじゅうちょう、天皇側近である侍従の長官)の鈴木貫太郎(すずきかんたろう)らを次々と襲いました。

いわゆる二・二六事件の始まりです。

二・二六事件によって高橋是清や斎藤実は暗殺され、鈴木貫太郎は重傷を負いました。首相の岡田啓介は危うく難を逃れましたが、当初は行方不明となり、死亡したと考えられていました。

襲われた人々は、青年将校にとっては憎むべき存在であったかもしれませんが、昭和天皇にとって

は、かけがえのない股肱(こう、最も頼りになる家来や部下のこと)の臣だったのです。

それだけに、昭和天皇のお怒りは激しいものがあり、直ちに「速やかに暴徒を鎮圧せよ」と命じられました。首相の安否が分からないことで、内閣不在で混乱が生じてもおかしくない事態を、陛下のお言葉によって収めることができたのです。

もし陛下の素早いご決断がなければ、我が国は皇道派によるクーデターによって政権が乗っ取られ、その後の運命がどのように変化したか分かりません。ただ、二・二六事件によって示された軍部の実力は、その後の内閣にも大きな影響を与え、事件後に組閣された広田弘毅(ひろたこうき)内閣によって、軍部大臣現役武官制が復活してしまいました。

これは「陸軍や海軍の大臣は現役の軍人に限る」という制度であり、もし内閣が軍部の意向に逆らうようであれば、軍部側は大臣を辞めさせたうえで、後任の人選を拒否することで、内閣を総辞職させることができるというカラクリがありました。

ところで、二・二六事件で重傷を負った鈴木貫太郎でしたが、とどめを刺されるところを、鈴木の子の懇願によって一命を取り留めました。この妻こそが「鈴木たか」、つまり幼年期の昭和天皇のお世話をした「足立たか」だったのです。自身の妻によって生き長らえることができた鈴木は、やがて歴史の大きな舞台に再び登場することになります。

二・二六事件以降の我が国を取り巻く様々な環境の変化によって、昭和天皇の平和へのお祈りもむなしく、ついに我が国は諸外国との対決の日々を迎えることになりました。

昭和16(1941)年12月8日、日本軍はアメリカ領であるハワイの真珠湾を攻撃し、大東亜戦争が始まりました。これに先立って、戦争開始の閣議決定の裁可を求められた昭和天皇は、ご自身のお気持ちを封印され、立憲君主制に基づく大日本帝国憲法の規定どおりにお認めになりました。

戦争開始に伴い、昭和天皇は開戦の詔書(しょうしょ、天皇の意思を表示した公文書のこと)を發表されました。漢文体で書かれた文面は、当時の東條英機(とうじょうひでき)内閣によって原案が作成されましたが、昭和天皇はその文面をご覧になった後に、あるお言葉を付け加えられました。そのお言葉を拝読した際に、私たちは陛下の本当のお考えを知ることができます。

「豈(あに)朕(ちん)ガ志(こころざし)ナラムヤ」

(現代語訳：どうしてこれが私の望むところであろうか、いや望むところではない)

### 3. 一日も早い戦争終結を願われて

我が国では、毎年正月に皇族の方々や一般の国民が、一つのお題に対して和歌を詠(よ)む歌会始(うたかいはじめ)という行事がありますが、大東亜戦争が始まった直後の昭和17(1942)年の歌会始で、昭和天皇は以下の御製(ぎょせい、天皇による和歌のこと)をお詠みになりました。

「峰つづき おほふむら雲 ふく風の はやくはらへと ただいのるなり」

厚い雲のように世界全体を巻き込んだ戦争が早く終わってほしい、という陛下の切実なお祈りのお気持ちを私たちは知ることができます。しかし、我が国は緒戦こそ勢いがあったものの、早期講和を実現させることができないまま、戦いが長期化したこともあって、徐々に劣勢に立たされていきました。

そして昭和18(1943)年5月29日には、アメリカ領アラスカ州西のアリューシャン列島の先にあるアッツ島にて日本軍が全員死亡するという、いわゆる玉砕(ぎょくさい)の悲劇が初めて起きてしまいました。

翌5月30日に悲報を耳にされた昭和天皇は、「アッツ島部隊は最後までよく戦った。そういう電報を打ってほしい」と仰いました。

しかし、現地の部隊は盗聴を防ぐため、玉砕の直前に無線機を壊しており、もはや無線は通じないですし、何よりも電報を受け取る相手が誰もいません。にもかかわらず、陛下は「それでも構わないから、電報を出してほしい」と重ねて仰いました。なぜ昭和天皇は、もはや通じない相手への電報にこだわられたのでしょうか。

縁起の良くない話で申し訳ないですが、私を含めて人間は必ずいつかは死にます。長年一緒に暮らした肉親を亡くすことは悲しくつらいですし、ましてや、子に先立たれた親の悲しみは、はかり知れないものがあるでしょう。

そして、目の前に息を引き取ったばかりの遺体が横たわっていれば、子は親の、親は子の名を何度も叫びながら泣き崩れます。何度呼びかけようが、二度と返事をする事ができないことなど分かりきっていますが、それでも呼びかけずにはいられません。

昭和天皇のご真意もそこにありました。我が国のために命をかけて戦い、そして散っていった兵士の一人ひとりが、陛下にとってはかけがえのない生命なのです。だからこそ、親が亡くなった子に対してそうするように、昭和天皇は二度と聞くことのできなない、ねぎらいのお言葉を兵士たちにかけてられたのでした。

我が国の戦局はますます悪化し、昭和19(1944)年10月25日には、爆弾を載(の)せた飛行機が敵の軍艦めがけて体当たりで突撃するという、いわゆる「神風特別攻撃隊」による攻撃が始まりました。

翌26日に作戦実行をお聞きになった昭和天皇は、「そのようにまでしなければならなかったのか！」と叫ばれ、しばし絶句された後に「しかしよくやった」と仰いました。このお言葉は決して特攻隊を称賛するのではなく、国のために生命を散らした兵士たちの尊い犠牲に対する、労(いたわり)のお気持ちが込められていると考えるべきではないでしょうか。

昭和 20 (1945) 年に入ると、我が国では極度の物資不足となり、航空機用のアルミニウムも足りなくなりました。このため、食器や鍋、あるいはヤカンなどの非軍事用のアルミニウム製品の回収運動が始まりましたが、日用品をすべて取り上げられては国民の暮らしが成り立ちません。運動をお知りになった昭和天皇は、国民生活への影響を心配されて「家庭で日常使うものまでは取り上げないように」と注意されたそうです。

また、国民の多くが食糧不足に悩まされている現実をお考えになった昭和天皇は、ご自身のお食事に国民と同じ配給を強くお命じになられ、代用食や水団(すいとん)などを進んでお召(め)し上がりになられました。

物資不足だけなら、苦しくても国民はまだ生きていけます。しかし、空から敵の軍隊に攻撃されてはひとたまりもありません。そして、その恐るべき事態が現実となる日がやって来てしまいました。

昭和 20 (1945) 年 3 月 9 日の夜から 10 日にかけて、アメリカの B29 爆撃機が東京に大挙して襲来し、あちらこちらで焼夷弾(しょういだん)による爆撃を行いました。いわゆる東京大空襲です。

わずか 1 回の空襲で約 26 万戸の家が焼かれ、12 万以上の人々が死傷し、100 万人を超える人々が焼け出されるという甚大な被害をもたらすなど、世界史上でも例を見ない、非戦闘員に対する大虐殺となりました。

空襲後、昭和天皇はご自身で被災地を訪問したいと希望なされ、約 1 週間後の 18 日に実現しました。空襲から間もない東京は焼け野原と化しており、焼け死んだ人々の遺体もそのままになっていました。陛下は被災者をお励ましになりながら、東京の変わり果てた姿に胸が痛む思いでいらっしやいました。

「もはや一刻の猶予(ゆうよ)もなく、一日も早く戦争を終わらせないといけない」。そうお考えになった昭和天皇は、翌 4 月の小磯国昭(こいそくにあき)内閣の総辞職後に、次の内閣総理大臣として、元侍従長の鈴木貫太郎を指名されました。ご自身との縁(えにし)が深い鈴木ならば、この戦争を終わらせることができると期待されたのです。

東京大空襲の以前から、軍部では昭和天皇に対して地方の安全な場所へと移動されることを願っていましたが、陛下は「私は国民とともにここ(=東京)で苦楽を分け合う」ときっぱり拒否されました。

そして、昭和 20 (1945) 年 5 月 25 日から 26 日にかけて東京が空襲にあった際には皇居にも飛び火し、明治天皇以来の宮殿が焼け落ちましたが、昭和天皇は「そうか、焼けたか。これでやっとみんなと同じになった」と仰られ、その後は昭和 36 (1961) 年末に新しい御所が完成するまで、防空壕(ぼうくうごう)としてつくられた御文庫(ごぶんこ)でお過ごしになりました。

後に終戦を迎えても、我が国の経済が回復し、国民の生活が向上するまでは新しい御所の造営をお認めにならなかったのです。国民の安寧な暮らしを常に願われていた、昭和天皇の大御心(おおみこ

る)をうかがい知ることができるお話ですね。

さて、その後も我が国の戦局は悪化するばかりであり、6月23日には沖縄における日本軍の守備隊が全滅しました。そして7月26日にはアメリカ・イギリス・中華民国（実際にはソ連）の3カ国によるポツダム宣言が出されました。

ポツダム宣言の内容は「軍隊の無条件降伏」こそ示されているものの、宣言文に「私たちの条件は以下のとおりである」という降伏の条件が記載されており、決して「国全体の無条件降伏」ではありませんでしたが、その一方で宣言文には重大な欠陥がありました。天皇の地位に対する保証が明記されていないのです。

いつの時代であろうとも、天皇なくして我が国の将来は有り得ません。このため、我が国ではポツダム宣言を受け入れるかどうか、態度を明確にしないまま連合国の出方をうかがうことにしたのですが、この裏には、アメリカによるとんでもない謀略が隠されていました。

実は、当初の宣言文には「日本が降伏すれば天皇の地位を保証する」と書かれていたのです。駐日大使の経験者で我が国の実情をよく知っていたグルーによって、我が国が宣言に応じやすいようにつくられていたのですが、土壇場(どたんば)でアメリカ大統領のトルーマンが削除しました。

トルーマンが削除した宣言が発表されたことによって、アメリカは宣言以前に決まっていた計画を実行に移しやすくなったのです。その計画こそが、悪名高い「原子爆弾の日本への投下」でした。

我が国がポツダム宣言を受け入れるか判断に迷っていた隙(すき)をついて、8月6日には広島、次いで9日には長崎に、アメリカによって原子爆弾が投下されました。原爆によって両都市の機能は完全に破壊され、何十万もの尊い生命が奪われるとともに、原爆による後遺症が私たち日本人を長い間苦しめ続けるなど、その被害は計り知れません。

我が国が降伏寸前であったにもかかわらず、まるで実験を行うかのように原爆を2つも落としたアメリカによる暴挙は、東京大空襲とともに国際法上でも決して許されることのない、民間人などの非戦闘員を対象とする空前の大虐殺です。

さらには、アメリカの原爆投下に慌(あわ)てたのか、ソ連がそれまでの日ソ中立条約を一方向的に破って8日に我が国に宣戦布告し、9日から満州北部などへの侵攻を開始しました。

このままでは北海道をはじめとする我が国北部の領土がソ連に奪われてしまいます。我が国はまさに絶体絶命の危機に陥(おちい)ってしまったのです。

## 4. ご聖断下る

我が国を取り巻いた数々の非常事態を受けて、8月9日の夜に、鈴木貫太郎首相はポツダム宣言を受け入れるかどうかを決めるため、昭和天皇の御前で会議を開くことを決めました。いわゆる御前

会議のことです。

会議は鈴木首相の他に、阿南惟幾(あなみこれちか)陸軍大臣、東郷茂徳(とうごうしげのり)外務大臣など合計 7 人で行われ、東郷外相は宣言の受諾を、阿南陸相はいわゆる本土決戦も辞さないと徹底抗戦をそれぞれ主張し、いつまで経っても平行線が続きました。

やがて日付も 10 日に変わり、開始から 2 時間経ったある時、鈴木首相は立ち上がって昭和天皇に向かい、こう言いました。

「出席者一同がそれぞれ考えを述べましたが、どうしても意見がまとまりません。まことに畏(おそ)れ多いことながら、ここは陛下の思(おぼ)し召(め)しをおうかがいして、私どもの考えをまとめたと思います」。

首相による発言をお受けになって、昭和天皇はお言葉を発せられました。

「それなら意見を言おう。私の考えは外務大臣と同じ (=ポツダム宣言を受諾する) である」。

昭和天皇のお言葉が発せられた瞬間、大臣らの目から涙がこぼれ落ち、やがて号泣に変わりました。陛下も涙を流されながら、お言葉を続けられました。

「念のため言っておく。今の状態で阿南陸相が言うように本土決戦に突入すれば、我が国がどうなるか私は非常に心配である。あるいは日本民族はみんな死んでしまうかもしれない。もしそうなれば、この国を誰が子孫に伝えることができるのか」。

「祖先から受け継いだ我が国を子孫に伝えることが天皇としての務めであるが、今となっては一人でも多くの日本人に生き残ってもらい、その人々に我が国の未来を任せる以外に、この国を子孫に伝える道はないと思う」。

「それにこのまま戦いを続けることは、世界人類にとっても不幸なことでもある。明治天皇の三国干渉の際のお心持を考え、堪えがたく、また忍びがたいことであるが、戦争をやめる決心をした」。

昭和天皇のご聖断によって、我が国は「国体(=天皇を中心とする我が国の体制のこと)を護(まも)る」という条件を付けることでポツダム宣言を受諾することを連合軍側に通知しました。

我が国の条件に対して、連合軍側は 8 月 12 日に回答を伝えましたが、その内容は「日本政府の地位は国民の自由な意思によって決められ、また天皇の地位や日本政府の統治権は、連合軍最高司令官に従属する」というものでした。

この条件では我が国が連合軍の属国になってしまう危険性があり、また何よりも天皇の地位の保証が不完全なままでした。この内容でポツダム宣言を受け入れるべきか、外務側と軍部側で再び意見が対立しましたが、ソ連による我が国侵略の脅威(きょうい)が間近に迫った現状では、もはや残された

時間はありませんでした。

そこで、鈴木首相は 14 日に改めて御前会議を開きました。会議では自らの意見を述べる者も、またそれを聞く者も、すべてが泣いていました。陛下も意見をお聞きになりながら何度も涙を流され、しばしば眼鏡を押さえられました。そして、昭和天皇による 2 度目のご聖断が下りました。

「私の考えは、この前言ったことに変わりはない。相手方の回答に対する不安もあるだろうが、私はそのまま受け入れて良いと思う。また玉砕して国に殉ずる思いもよく分かるが、私自身はいかになろうとも、国民の生命を助けたい」。

ご聖断が下った後、阿南陸相は耐え切れずに激しく慟哭(どうく、悲しみのあまり声をあげて泣くこと)しました。昭和天皇はそんな阿南陸相に対して優しく声をおかけになりました。

「阿南、お前の気持ちはよく分かっている。しかし、私には国体を護れる確信がある」。

昭和天皇によるご聖断は下りましたが、それだけでは、大日本帝国憲法の規定においては何の効力も持たず、内閣による閣議で承認されて、初めて成立するものでした。もし閣議の前に阿南陸相が辞任して、後任者の選任を陸軍が拒否すれば、軍部大臣現役武官制によって鈴木内閣は崩壊し、ご聖断をなかったことにすることは可能でした。

陸軍内の強硬派は、戦争継続のために阿南陸相に辞任を迫りましたが、阿南は以下のように一喝(いっかつ)しました。

「ご聖断が下った以上はそれに従うだけだ。不服の者あらば自分の屍(しかばね)を越えてゆけ！」

ご聖断が下った後の閣議では、昭和天皇による「終戦の詔書(しょうしょ)」の内容についても審議されましたが、阿南陸相は黙って閣議の決定に従いました。そして鈴木首相に別れの挨拶(あいさつ)を告げると、すべての責任を取って、翌 8 月 15 日午前 4 時 40 分に、昭和天皇から拝領したワイシャツを身に着けて割腹(かっぷく)自決しました。

想像を絶する痛みや苦しみのなか、阿南陸相は介錯(かいしゃく、とどめを刺して楽にすること)を断り、午前 7 時 10 分に絶命しました。以下は血染めの遺書に残された、阿南陸相の最期の言葉と辞世です。

「一死以テ大罪ヲ謝シ奉(たてまつ)ル 神州不滅ヲ確信シツツ」

「大君(おおきみ)の 深き恵に 浴(あ)みし身は 言いのこすべき 片言(かたこと)もなし」

阿南陸相の自害をお知りになった昭和天皇は仰いました。

「阿南には阿南の考えがあったのだ。気の毒な事をした」。

人望が厚かった阿南陸相の割腹自決は、陸軍全体に大きな衝撃を与え、若干(じゃっかん)の離反はあったものの、その後の徹底抗戦への動きを封じることができました。阿南陸相は昭和天皇のご聖断を確かなものにするため、自ら命を絶つとともに、責任の重さから介錯を断って、最期を迎えるまで苦しみ抜いたに違いありません。

陸軍の最高責任者として、戦争への責任などが何かと問題視される阿南陸相ですが、昭和天皇のご聖断を受けて陸軍全体をまとめ上げ、最後にはすべての責任を一人で取ったその潔い姿勢は、立派なものであったというべきでしょう。

また、陛下の侍従長として長く仕えたことで、昭和天皇とまさに阿吽(あうん)の呼吸でご聖断を導き出し、本土決戦による我が国滅亡の危機や、ソ連の参戦による北海道などの侵略をギリギリのタイミングで防ぎきった、鈴木首相の政治力も素晴らしいものでありました。

国民のこのことを考え、自らを顧(かえり)みずの下された昭和天皇のご聖断の背景には、こうした「忠臣」による我が国への無私(むし、私心や私欲のないこと)の行動もあったのです。

昭和20(1945)年8月15日の正午、昭和天皇がお自ら録音された「終戦の詔書」が、ラジオを通じて全国民に伝えられました。いわゆる玉音放送によって、国民は戦争に負けたことを初めて知り、悔し涙を流しました。

「終戦の詔書」は御前会議での陛下のお言葉をもとに起草されましたが、その中で最も重要な部分が、実は最後に記されていることを皆さんはご存知でしょうか。

「爾(なんじ)臣民其(そ)レ克(よ)ク朕(ちん)ガ意ヲ体(たい)セヨ」  
(現代語訳：我が国民は以上の私の意思に基づいて行動してほしい)

このお言葉があったからこそ、終戦後に連合軍が上陸しても、軍人は肅々(しゅくしゅく)と武装解除に応じ、国民も黙って現実を受け入れたのです。

終戦にあたり、昭和天皇は以下の四首の御製を詠まれました。いずれも、陛下の戦争終結を願われた深いお考えがしのべれますね。

「爆撃に たふれゆく民の 上をおもひ いくさとめけり 身はいかならむとも」

「身はいかに なるともいくさ とどめけり ただたふれゆく 民をおもひて」

「国がらを ただ守らんと いばら道 すすみゆくとも いくさとめけり」

「海の外(と)の 陸(くが)に小島に のこる民の うへ安かれと ただいのるなり」

こうして我が国は終戦を迎えましたが、昭和天皇の「国と国民を護る」ための日々は、この後も長

く続くのでした。

## 5. 終戦直後の昭和天皇と皇室をめぐる様々な動き

大東亜戦争終結から約1ヵ月が経った昭和20(1945)年9月27日、昭和天皇は連合国軍最高司令官総司令部(=GHQ)のマッカーサー元帥(げんすい)と会見されるため、アメリカ大使の公邸へと向かわれました。マッカーサーは陛下を玄関に出迎えることもなく、会見場となった迎賓室(げいひんしつ)で待機していました。

この当時、マッカーサーは「戦争終結後に日本軍が速やかに武装解除に応じたのは、天皇が出した勅令(=終戦の詔書)があったからだ」という事実を耳にしていたこともあり、昭和天皇を戦争犯罪人とするかどうかを慎重に検討していました。

しかし、同時にマッカーサーは昭和天皇との会見に不安を感じていました。もし天皇が自分に対して命乞(いのちご)いをするような人物であったら、やはり戦犯として裁かざるを得ないのでは、と考えていたのです。

マッカーサーがそう思うのも無理はありませんでした。そもそも戦争に敗北した国の元首の末路は、亡命や自殺、あるいは市井の人間として不遇な人生を終え、その血は途絶えてしまい、全く新しい王朝に取って代わるのが当然だったからです。

ところが、昭和天皇がマッカーサーに対して発せられたお言葉は、彼の不安を打ち消すどころか、想像にすら及ばないものでした。

「日本の戦争責任のすべてはこの私にある。自分の身はどうなってもかまわないから、飢えている国民のためにぜひ食糧援助をお願いしたい。ついては、皇室財産の有価証券類をまとめて持ってきたので、その費用の一部に充(あ)てて欲しい」。

昭和天皇のお言葉を聞いたマッカーサーは「われ神を視たり！」と大いに感動して、それまで陛下の前で椅子に座り、足を組んでパイプをくわえたままの姿勢からやおら立ち上がると、抱きつかんばかりに陛下と握手を交わしました。なお、マッカーサーは後に当時の心境を「この瞬間、私の前にいる天皇が日本の最上の紳士であることを感じとった」と述懐しています。

会見が終了して昭和天皇がお帰りになる際には、マッカーサーは自ら玄関まで出て陛下を見送りました。たった一度の会見だけで、マッカーサーは陛下のお人柄の虜(とりこ)となってしまうのでした。

マッカーサーの態度を豹変(ひょうへん)させたのは、昭和天皇が強く感じておられた戦争に関する責任のお気持ちでした。先述のとおり、大東亜戦争の開戦そのものは、大日本帝国憲法の規定に従って手続きが進められ、昭和天皇は閣議決定の裁可をそのままお認めになられたただけでした。

立憲君主制の原則から見ても、昭和天皇に直接の戦争責任があるとは到底認められないものでしたが、その一方で、陛下はご自身のお力で戦争を防ぐことができなかつた「道義的責任」を強く感じておられました。だからこそその「戦争責任のすべてはこの私にある」というお言葉だったので。

会見を終えたマッカーサーは、後に軍事補佐官のボナー＝フェラーズによる「もし天皇が戦争犯罪人として裁かれれば、日本の統治機構は崩壊し、全国民的反乱が避けられなくなる」との進言を受けいれ、昭和天皇を戦犯として訴追(そつゐ)しませんでした。

昭和天皇の無私のご行動によって、皇室を中心とする我が国の国体(=天皇を中心とする我が国の体制のこと)を護ることはできました。

終戦の直前、昭和天皇による2度目のご聖断が下つた際に、慟哭(どうこく)した阿南惟幾陸軍大臣に対して、陛下がお優しく「私には国体を護れる確信がある」と仰られたとおりのことです。

もしマッカーサーとのご会見の際に、昭和天皇が他の一般的な国家元首のように、命乞いをする哀れな君主であつたとすれば、その後の我が国の運命はどうなつたでしょうか。考えただけでも私は寒気がしてきます。

我が国が終戦を迎えて数ヵ月が経ちましたが、空襲を受けた皇居の周辺は、手入れをされることもなく荒れ果てており、ところどころに草が生い茂っていました。その様子を耳にした宮城県栗原郡(みやぎけんくりはらぐん)の数十人の青年たちは、昭和20(1945)年12月に上京して、皇居の護衛官に「皇居周辺の草刈りやお掃除をさせてほしい」と申し出ました。

連絡を受けた宮内省(現在の宮内庁)の職員は感謝して、「せっかくですから、皇居の中も片付けていただけませんか」とお願いすると、皇居内で奉仕できることを知つた青年たちは喜びました。そして迎えた作業開始の日の朝、青年たちは考えもしなかつたサプライズを経験することになりました。

青年たちの前に、何と昭和天皇ご自身が歩いて来られたのです。陛下は感謝のお気持ちを語られるとともに青年たちの身の上などをお尋ねになり、最後に「何とぞ国家再建のために努力してほしい」と仰いました。そして陛下がお帰りになられる際に、感極まつた青年たちは、当時GHQによって禁止されていた国歌「君が代」を涙ながらに歌いました。

この話は全国へと伝わり、その後も各地から皇居への勤労奉仕に向かう人々が後を絶ちませんでした。この慣習は現在も「皇居勤労奉仕団」として続いており、奉仕した人々は延べ100万人以上に達しています。

なお「皇居勤労奉仕団」は宮内庁で募集しており、15人以上60人以内の団体であれば、一時期を除いて受け付けています。詳しくは下記のホームページをご覧ください。

<http://www.kunaicho.go.jp/event/kinrohoshi.html>

昭和天皇は、初めてGHQのマッカーサー元帥にお会いなされた以降も、合計11回にわたって訪

問され、我が国への食糧供給などをご要望されるなど、常に国民のために無私の行動をなさっておられました。

ところで、昭和天皇は昭和 21 (1946) 年の元日に「新日本建設ニ関スル詔書」を發布なされましたが、今日ではこれが昭和天皇による「人間宣言」とされ、自ら「天皇の神格化を否定した」と、一般に使用される教科書で紹介されることが多いですが、この表現は正しくはありません。

なぜなら、そもそも「新日本建設ニ関スル詔書」の中に「人間」「宣言」という言葉が一切使用されておらず、さらには「人間宣言」という名称自体が、後日にマスコミや出版社が勝手に命名したものだからです。

では、なぜ私たちは「人間宣言」に対して思い違いをしているのでしょうか。その謎を探るために、そもそも「新日本建設ニ関スル詔書」が発表された経緯を振り返ってみましょう。

昭和 20 (1945) 年 12 月、GHQ は我が国と神道(しんとう)のつながりを断ち切るため、国家が神道を支援したり、あるいは普及させたりすることを禁止する神道指令を発しましたが、その次の段階として、天皇の神格化を否定しようと考えました。しかし、これを GHQ の主導で無理やり行えば、日本国民の反発を招き、占領政策に悪影響となるのは確実でした。

このため、GHQ は昭和天皇があくまでも「自主的」に神格化を否定することを期待したことで、その意を汲(く)んだ宮内省によって、GHQ を納得させることができる詔書の作成が行われました。

こうした動きに対し、昭和天皇は元々自らが現人神(あらひとがみ)であることを否定されておられたので、特に問題には思われませんでした。なぜなら、天皇と国民とのつながりは、神格化によってのみ保たれるような弱いものではないことを、陛下ご自身が一番理解されておられたからです。

「新日本建設ニ関スル詔書」の文章の中で、一般的に人間宣言の根拠となっているのは以下の部分です。

「天皇ヲ以テ現御神(あきつみかみ)トシ、且(かつ)日本国民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延(ひい)テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基(もとづ)クモノニモ非(あら)ズ」。

この文章だけ読めば、昭和天皇が自らの神格化を否定されたと見なすことも不可能ではないですが、これは詔書のほんの一部分に過ぎませんし、陛下が本当に仰りたかった内容は、実はこの文章の直前にあるのです。

「然(しか)レドモ朕(ちん)ハ爾等(なんじら)国民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚(きゅうせき)、喜びや悲しみのことヲ分(わか)タント欲ス。朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯(ちゅうたい)ハ、終始相互ノ信賴ト敬愛トニ依(よ)リテ結(むす)バレ、単ナル神話ト伝説トニ依(よ)リテ生(な)ゼルモノニ非(あら)ズ」。

陛下は常に国民とともに存在し、国民と利害を同じくして、喜びも悲しみも一緒に分かち合いたい

と仰ったうえで、天皇と国民との間の紐帯、すなわち強い絆(きずな)は単なる神話や伝説によってではなく、相互の信頼と敬愛とによって結ばれているとされておられるのです。

昭和天皇が「新日本建設ニ関スル詔書」の中で仰っておられることは、終戦の詔書などと比較しても際立って新しいこととはいえませんし、むしろ常日頃からお考えだからこそ、繰り返し強調されておられるのではないのでしょうか。

ところで、この詔書の最初に、明治天皇による「五箇条の御誓文」が紹介されているのを皆さんはご存知でしょうか。詔書に五箇条の御誓文を付け加えられたのは昭和天皇ご自身のお考えであり、実はこのことこそが、陛下が詔書において本当に仰りたかったことなのです。

昭和 52 (1977) 年、昭和天皇は記者からの質問にお答えなさるかたちで、詔書の始めに五箇条の御誓文が引用されたことについて、以下のようにお言葉を発せられました。

「それが実はあの詔書の一番の目的であり、神格とかそういうことは二の問題でした。当時はアメリカその他諸外国の勢力が強く、日本が圧倒される心配があったので、民主主義を採用されたのは明治天皇であって、日本の民主主義は決して輸入のものではないということを示す必要があった。日本の国民が誇りを忘れては非常に具合が悪いと思って、誇りを忘れさせないためにあの宣言を考えたのです」。

つまり、昭和天皇は「新日本建設ニ関スル詔書」において、天皇と国民との絆は、神格化によらずとも相互の信頼と敬愛とによって固く結ばれていることや、我が国の民主主義は外国によるものではなく、明治天皇の頃から我が国独自で育て上げてきたものであるという、いわば当然のことを言葉とされることで、終戦で傷ついた国民の誇りを失わないように配慮されたのです。

それなのに、マスコミや出版社の多くが「天皇が神格化を否定した」という、詔書のほんの一部に過ぎず、かつ陛下の本当のご意思とは全く異なる部分だけを取り上げて「人間宣言」ともてはやし、ついには歴史教科書にまで記載されてしまっているのです。なぜこのような誤解が生まれてしまっているのでしょうか。

さて、同じ昭和 21 (1946) 年正月の歌会始において、昭和天皇は以下の御製をお詠みになられました。

「ふりつもる み雪にたへて 色かへぬ 松ぞ雄々(おお)しき 人もかくあれ」

終戦直後の絶望感が漂(ただよ)う中であっても、雪の中の青々とした松のように国民も強く生きて欲しいという、昭和天皇の国民への思いやりが込められています。

またこの頃、陛下は国民を慰めるためには自分がどうすればよいのかをお考えになり、そのための行動に移ろうとされておられました。

## 6. 昭和天皇のご巡幸

昭和 20 (1945) 年 10 月、昭和天皇は宮内省の役人に対して下記のお言葉を発せられ、全国をご巡幸される強い決意を示されました。

「先の戦争によって先祖からの領土や国民の多くの生命を失い、大変な災厄を受けた。この際、私としてはどうすればよいのかと思ひ、退位も考えた。しかし、よくよく考えた末、全国をくまなく歩いて国民を慰め、励まし、また復興のために立ち上がらせるための勇気を与えることが自分の責任と思う」。

「このことをどうしても早い時期に行きたいと思う。ついては、宮内官(=宮内省の役人のこと)たちは私の健康を心配するだろうが、自分はどんなになってもやりぬくつもりであるから、健康とか何とかはまったく考えることなくやってほしい。宮内官はその志(こころざし)を達するよう全力を挙げて計画し実行してほしい」。

今までに経験したことのない敗戦を喫して、大きく傷ついた国民を励まし、復興へ向けて立ち上がらせる勇気を持たせたい。そのためには自分の生命がどうなってもかまわない。そんな昭和天皇の崇高(すうこう)なるお考えを、GHQ が理解できるはずがありませんでした。

戦争に負けた国の当時の最高権力者が直(じか)に国民に会うことはもちろん、まして励ますなど、世界の常識では考えられないことでした。なぜなら、先述したように、戦争に敗北した国の元首の末路は悲惨なものであり、またその血統は断絶して、新しい王朝が誕生するのが当然だったからです。

それだけに、陛下のご巡幸の計画を聞いた GHQ も、当初は「天皇の意図が分からない」と怪しまりましたが、やがて一つの確信を得るに至って、敢えて許可しました。

「ヒロヒトのおかげで、父親や夫が殺されたんだから、旅先で石のひとつでも投げられればいいのさ」

「ヒロヒトが 40 歳を過ぎた猫背の小男であるということを知らしめてやる必要がある。神さまじゃなくて人間だ、ということを知」

「それこそが生きた民主主義の教育というものだよ」

GHQ の役人たちには、昭和天皇のご巡幸によって多くの国民から無視され、蔑(さげす)まれ、疎(う)とまれ、あるいは暴力をもって迎えられるといった惨(みじ)めな姿しか想像できませんでした。しかし、彼らの期待は別の意味で大きく裏切られることになるのです。

昭和天皇によるご巡幸は、昭和 21 (1946) 年 2 月の神奈川県下の昭和電工を振り出しに始められましたが、この付近は終戦後にアメリカ軍が接収(=権力機関が個人の所有物を強制的に取り上げる)しており、我が国の中でも占領色が一段と濃い場所でした。

それだけに、会場には外国のカメラマンやアメリカ兵たちがひしめき合っており、彼らによって昭

和天皇はあちこち引っ張られるなどもみくちやにされました。

しかし、陛下は全く意に介されずに社長の説明を静かにお聞きになり、また工員たちには「生活状態はどうか」「食べ物は大丈夫か」「家はあるのか」など細かくお尋ねになりました。外国人から何をされても「耐え難きを耐え」、また口先だけとは考えられない陛下の工員たちに対するお優しいお姿に、涙が止まらない人もいたそうです。

「わざはひを わすれてわれを 出むかふる 民(たみ)の心を うれしとぞ思ふ」

昭和 21 (1946) 年のご巡幸の際における陛下の御製です。

その後もご巡幸を続けられた昭和天皇は、GHQ の予想を大きく覆(くつがえ)して、各地の国民から熱烈な歓迎をお受けになりました。しかし、何と言っても終戦直後です。全国各地の中にはまともな宿泊施設は少なく、列車の中や学校の教室などに泊まれた事もありました。

しかし、陛下は「戦災の国民のことを考えれば何でもない。十日ぐらいい風呂に入らなくてもかまわない」と全く気にされることもなく、元氣にご巡幸の毎日をお過ごしになりました。

昭和 22 (1947) 年 8 月の暑い盛りに福島県の炭坑をご巡幸された際には、地下 450m の地底まで降りられ、さらに 40 度を超える炎暑の坑内を 150m も歩かれて、居並ぶ坑夫たちを激励されました。

当時は石炭が貴重なエネルギーでしたが、陛下のお出ましに感激した坑夫たちによって、その後の出炭率が急上昇したそうです。以下は当時の情景を詠まれた御製です。

「あつさつよき 磐城(いわき)の里の 炭山に はたらく人を ををし(=雄々し)とぞ見し」

昭和 22 (1947) 年 12 月 7 日に、昭和天皇は原爆の地である広島にお入りになりました。陛下は原爆による孤児たちをご覧になって励ましのお言葉をお掛けになり、また原爆症で頭髪が抜け落ちた男の子の頭を抱(かか)え込むようにして、しばし御目頭(おめがしら)を押さえられました。そんな陛下のお姿に周囲の群集も静まり返り、やがてすすり泣きの声が聞こえてきました。

奉迎場(ほうげいじょう、身分の高い人をお迎える場所)となった広島護国神社の跡地には、何と 7 万人もの人々が集まりました。昭和天皇はマイクを使用されて、以下のお言葉を発せられました。

「このたびは皆の熱心な歓迎を受けてうれしく思う。本日は親しく市内の災害地を視察するが、広島市は特別な災害を受けて誠に気の毒に思う。広島市民は復興に努力し、世界の平和に貢献しなければならない」。

陛下の激励に対して、7 万の群衆が一体となって「天皇陛下万歳！」と何度も何度も叫びましたが、GHQ の関係者は、特に天皇を恨んでいる者が多いと思っていた被爆地の広島でのこの様子に、驚

くとともに恐ろしくなりました。

この影響もあったのか、翌昭和 23（1948）年にご巡幸は中止となりましたが、多くの国民の熱意によって、翌昭和 24（1949）年に再開されました。以下は広島における陛下の御製です。

「ああ広島 平和の鐘も 鳴りはじめ たちなほる見えて うれしかりけり」

昭和 24（1949）年 5 月 22 日、佐賀県にお入りになった昭和天皇は、主に満州で両親を亡くした孤児たちを預かった、因通寺(いんどおりじ)の洗心寮(せんしんりょう)にお越しになりました。

寮の各部屋の孤児一人ひとりに対して声をかけられた陛下は、最後の部屋で父と母の位牌(いはい)を抱いていた女の子に目を留められ、お尋ねになりました。

「（位牌をご覧になって）お父さん、お母さん？」

「はい、そうです」。

「どこで？」

「父はソ満(そまん、ソ連と満州のこと)国境で、母は引揚げの途中で亡くなりました」。

じっと女の子の顔をご覧になった陛下は、悲しそうな顔をされてお言葉を続けられました。

「おさびしい？」

「いいえ、さびしくはありません。私は仏の子供ですから、お父さんやお母さんに会いたいと思えば、み仏様の前に座って呼びかければ、そばにやって来てそっと私を抱きしめてくれます。ですから私はさびしくはありません」。

昭和天皇は女の子の前に歩み寄られ、二度三度と頭をなでられると、

「仏の子供はお幸せね。これからも立派に育ておくれよ」。

そう仰った昭和天皇の目から、はたはたと涙が流れ落ち、女の子は小さな声で「お父さん」と陛下を呼びました。

このとき、その場にいた大人たちは、東京から随行した新聞記者も含めて、皆が顔を覆(おお)って泣いたそうです。

「みほとけの 教(おしえ)まもりて すくすくと 生(お)ひ育つべき 子らにさちあれ」

上記の御製は、因通寺の梵鐘(ぼんしょう)に鑄込(いこ)まれています。

因通寺の参道には、遺族や引揚げ者も大勢つめかけていましたが、昭和天皇は最前列に座っていた年老いた女性に声をかけられました。

「どなたが戦死をされたのか」。

「息子でございます。たった一人の息子でございます」。

声を詰まらせながら返事をする老婆に、陛下は続けて声を掛けられました。

「どこで戦死をされたの？」

「ビルマ(現在のミャンマー)でございます。激しい戦いだったそうですが、息子は最後に天皇陛下万歳と言って戦死をしたそうです。息子の命は陛下に差し上げております。息子の命のためにも、長生きをしてください」。

そう言って老婆は泣き伏してしまいました。じっと耳を傾けておられた昭和天皇は、流れる涙をそのままに、老婆を見つめられておられたそうです。

次に、引揚げ者の一団の前を通られた昭和天皇は、その場で足をお止めになられると、深々と頭を下げられ、お言葉を掛けられました。

「長い間、遠い外国でいろいろ苦労して大変であったらと思うとき、私の胸は痛むだけでなく、このような戦争があったことに対し、深く苦しみをともしするものであります。皆さんは、外国において、いろいろと築き上げたものを全部失ってしまったことであるが、日本という国がある限り、再び戦争のない平和な国として新しい方向に進むことを希望しています。みなさんと共に手を携(たず)さえて、新しい道を築き上げたいと思います」。

昭和天皇のお言葉を受け、引揚げ者の一人が陛下に近づいて、以下のように言いました。

「私は陛下を恨んだこともありました。しかし苦しんでいるのは私だけではなく、陛下も苦しんでいらっしゃる事が今分かりました。今日からは決して世の中を呪いません。人を恨みません。陛下と一緒に私も頑張ります！」

この言葉に対して、側(そば)にいた青年が声をあげて泣き伏(ふ)しました。

「こんなはずじゃなかった。こんなはずじゃなかった。俺が間違っておった。俺が誤っておった！」

実は、彼らはシベリアへ抑留(よくりゅう)された際にソ連によって徹底的に洗脳され、日本の共産革命の尖兵(せんぺい)として、いち早く帰国を許されていた青年たちでした。彼らは今回の行幸(ぎょうこう)

で、暴力をもってしても昭和天皇に戦争責任を認めさせ、それを革命の起爆剤にしようと待ちかまえていたのです。

泣きじゃくる青年に対して、陛下は頷(うなず)きながら微笑みかけられました。昭和天皇による慈愛(じあい)に満ちたお振る舞いやお言葉が、洗脳された青年たちの心を溶かしたのです。

その後も昭和天皇によるご巡幸は続けられ、昭和 29 (1954) 年 8 月の北海道ご視察まで、当時アメリカの占領を受けていた沖縄を除く全国 46 都道府県において、日数にして 165 日、延べ 3 万 3 千 km にも及びました。陛下がご巡幸の際に直接お声を掛けられた人々は、2 万人にものぼったといわれています。

ご巡幸において人々を励まされ、人々と共に悲しまれ、そして涙を流された昭和天皇のお姿を間近に拝見した国民は大いに感激するとともに、陛下の大御心(おおみこころ)に恥じないように自分たちも頑張らなければいけない、という気持ちが自然と芽生えていきました。

多くの国民が共通して抱いた熱意は、その後の復興への目覚ましいエネルギーとなったのです。

## 7. 昭和から平成へ

ところで、皆さんは天皇陛下の国際的な序列がどのあたりにあるかをご存知でしょうか。世界各国には様々な身分が高かったり、あるいは尊敬を集めたりする人々が存在しますが、そんな中で最も国際的に権威があるとされているお一人に、ローマ教皇がおられます。

現在のローマ教皇は第 266 代のフランシスコですが、先々代のヨハネ・パウロ 2 世が昭和 56 (1981) 年に、ローマ教皇として初めて来日されました。その際に教皇はお自ら昭和天皇をご訪問されたのですが、このことが世界に大きな衝撃を与えました。

なぜなら、ローマ教皇が外国をご訪問されて、その国の元首や首相にお会いになる際は、訪問先の元首や首相が教皇を訪ねて会いに来るのが慣例だったからです。教皇ご自身が皇居までお出かけになられ、陛下にお会いされるというのは、前例のない、非常に大きな出来事だったのです。

世界最高の権威でいらっしゃるローマ教皇が、なぜお自ら足を運ばれたのでしょうか。それは、昭和天皇をはじめとする皇室の方々には、脈々と受け継がれた「奇跡の血統」が存在するからです。

神話の世界を含めて、天皇陛下は 125 人おられますが、そのいずれの方々も、初代の神武(じんむ)天皇の血を、2670 年以上もの長いあいだ絶えることなく受け継がれておられます。

125 人の中には女性の天皇もおられますが、いずれも神武天皇の直系にあたられる、いわば「男系の女性天皇」であり、女系、すなわち神武天皇の血を全く受け継いでおられない天皇は、過去に一人も存在しません。

これだけ長いあいだ同じ血を受け継がれてきた皇帝は、天皇以外で世界中のどこにも存在しません。我が国の天皇は「世界最古にして最後の皇帝」であり、まさに「皇帝の中の皇帝」なのです。

だからこそ、ローマ教皇は自然と昭和天皇に敬意を表され、また昭和天皇が外国をご訪問された際には、イギリスのエリザベス女王は上座をお譲りになり、アメリカのフォード大統領は最高の敬意を表すホワイトタイで出迎えたのです。また、オバマ大統領が来日して今上陛下に面会した際に、深々と頭を下げていたのは記憶に新しいですね。

神武天皇の男系の血は、今上陛下から秋篠宮文仁親王殿下(あきしののみやふみひとしんのうでんか)を通じて悠仁(ひさひと)親王殿下に現在も受け継がれておられます。ローマ教皇と並ぶ世界のトップ 2 に、キリスト教信者でなく、また白色人種でもない天皇があらせられるという非常に重い現実を、私たち日本国民も光栄に思いながらしっかりと守り続けていきたいですね。

時は流れて、終戦から 30 年以上が過ぎ、世界に比類なき経済大国となった我が国でしたが、その一方で、道徳などの教育や我が国独自の安全保障問題といった重要な課題を疎(おろそ)かにしたツケが、やがて国や国民に対して重くのしかかることになりました。

なぜそうなってしまったのかといえば、年月が経って戦争体験が風化するにつれて、公職追放によってあらゆる業界を支配した左翼思想の猛毒が我が国の全身に回り、いわゆる「WGIP(=ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム、日本人に戦争犯罪者意識を刷り込む計画)」が種をまいた自虐史観が、売国的日本人によって増殖し続けたからであり、その一つに、今から 30 年以上前に起きた、忌まわしき「教科書誤報事件」があります。

鈴木善幸(すずきぜんこう)内閣時代の昭和 56 (1981) 年に、政府与党の自民党が教科書制度改革案を発表しましたが、これに危機感を抱いた人々によって「日本が再び軍国主義の道を歩む」などと政治問題化されたとともに、わざわざ中華人民共和国や韓国に「ご注進」が行われました。

そして、翌昭和 57 (1982) 年 6 月に「日本の教科書検定によって、中国華北への『侵略』が『進出』に書き換えられた」と我が国の大新聞が一斉に報道し、中国や韓国が日本政府に抗議する騒ぎとなりましたが、これは全くのデマであり、明らかな誤報でした。

にもかかわらず、当時の宮澤喜一(みやざわきいち)内閣官房長官が「近隣の諸国民の感情に配慮した教科書にする」という主旨の発言をしたこともあって、以後の教科書検定において「近隣諸国条項」という名の自主規制が設けられてしまったのです。

教科書誤報事件によって、我が国の教科書検定という、完全に日本国内の問題でありながら、中国や韓国に「検閲権」を認めてしまったことで、健全な青少年の育成に欠かせない教科書が、外国の干渉を平気で受け入れるようになってしまいました。

しかも、この問題が表面化した以降に、中韓両国による執拗(しつよう)な内政干渉や、我が国の謝罪外交が常態化するという悪しき慣習を生み出してしまい、それらは今もなお我が国に深刻な影響を

及ぼし続けています。

なお、事実と全く異なる報道を行った大新聞のうち、その後に正式に謝罪をしたのは、産経新聞ただ一社のみです。

さらに昭和 60（1985）年には、当時の中曽根康弘（なかそねやすひろ）首相が終戦記念日の 8 月 15 日に靖國神社を公式に参拝した際に、教科書誤報事件と同様に中韓両国などによる猛反発を受けたことで、以後の参拝を中止しました。

このことによって、我が国の一部マスコミが中心となって、歴代の首相や大臣らが靖國神社に参拝することをためらわせる風潮をつくり上げるきっかけとなったのではないかと考えられており、現代の安倍内閣にまでその影響が続いてしまっています。

なお、中曽根首相が靖國神社への参拝を取りやめた昭和 61（1986）年の終戦記念日に、昭和天皇は以下の御製をお詠みになっておられます。

「この年の この日にもまた 靖國の みやしろのことに うれひはふかし」

先述のとおり、昭和 20 年代にかけて全国をご巡幸なされた昭和天皇でしたが、昭和 47（1972）年にアメリカから返還された、沖縄県へのご巡幸が達成できていませんでした。

昭和 62（1987）年に沖縄で秋の国民体育大会が行われることになり、開会式ご出席も兼ねてようやく念願のご行幸（ぎょうこう）が実現できると思われましたが、その直前に、ご病気によって中止となってしまいました。

陛下のご無念のお気持ちは、以下の御製で私たちもうかがい知ることができます。

「思はざる 病（やまい）となりぬ 沖縄を たづねて果（はた）さむ つとめありしを」

実はこの当時、昭和天皇は病魔に蝕（むしば）まれておられました。宮内庁は陛下の玉体（ぎょくたい、天皇などの身分の高い人物のからだのこと）にメスを入れる決断を下しました。手術は成功して昭和天皇はお元氣を取り戻されましたが、翌昭和 63（1988）年の夏頃から、急激に体調が悪化されました。

終戦記念日の 8 月 15 日に日本武道館で行なわれた全国戦没者追悼式に際して、昭和天皇はご療養先的那須御用邸からヘリコプターで駆けつけられましたが、そのやつれたお姿に対して、多くの国民が息をのみました。

この日の陛下の御製です。

「やすらげき 世を祈りしも いまだならず くやしくもあるか きざしみゆれど」

御用邸から皇居に戻られて間もない9月19日の夜、昭和天皇は大量の吐血をされてご重体となりました。天皇陛下のご不例に際し、各地で計画されていた祭りや祝賀行事などが一斉に中止になるなど、日本国内は自粛モード一色になりました。

その余りもの自粛ぶりに、一部の国民やマスコミからは不満の声も上がりましたが、国民のこのみはずっとお考えになり、自らを顧みられることのなかった陛下がご重体となっておられるというのに、何も考えずに馬鹿騒ぎをすることが果たして許されるでしょうか。その証拠に、陛下のお見舞いのため皇居へ記帳に訪れた国民の数は、ご不例から3ヵ月間で延べ800万人を越えているのです。

昭和天皇のご容態はその後も芳(かんば)しくない日々が続きましたが、そんな中でも陛下は国民のことを第一にお考えになっておられました。この年の我が国では秋の長雨が続いていましたが、そんなある日、雨音を耳にされたご病床の昭和天皇が「雨が続けているが、稲の方はどうか」とコメの作柄(さくがら)を案じられたというエピソードが残っています。

ご不例になられてからも、陛下は驚異的な生命力で病魔と闘っておられましたが、年が明けた昭和64(1989)年1月7日午前6時33分、太陽が静かに沈んでいくように、昭和天皇は崩御されました。御年87歳でした。

昭和天皇の崩御に際して、多くの国民が悲しみに包まれました。崩御から約1ヵ月半後の2月24日に、新宿御苑でおごそかに行なわれた大喪の礼では、折からの氷雨にもかかわらず、世界164ヵ国、28国際機関の弔問(ちょうもん)使節が世界各国から参集しました。

わずか半世紀近く前に世界の多くの国を相手に激しく戦った国の元首であるにもかかわらず、恩讐を越えて、昭和天皇に弔意を示したのです。また、皇居から新宿御苑へ続く6.5kmの雨の沿道において、昭和天皇をお見送りした国民の数は、実に60万人にも及びました。

昭和という激動の時代を長く生き抜き、国民の象徴として我が国を支えてこられた昭和天皇。自らが果たすことがかなわなかった沖縄へのご行幸は、先述のとおり、今上陛下によって平成5(1993)年4月に実現されました。

そして崩御から18年後の平成19(2007)年、昭和天皇のお誕生日である4月29日が、「激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす」との目的で、新たに「昭和の日」として蘇(よみがえ)りました。

昭和が終わって早や四半世紀が過ぎましたが、国民とともに歩まれた昭和天皇の大御心(おおみこころ)は、今もなお、そして永久に日本国民の心の中に生き続けていくことでしょう。(完)

主要参考文献：「昭和天皇 ご生誕 100 年記念」（著者：出雲井晶 出版：産経新聞 NS）  
「天皇家の密使たち」（著者：高橋紘・鈴木邦彦 出版：文藝春秋）  
「昭和天皇の御巡幸」（著者：鈴木正男 出版：展転社）  
「天皇さまが泣いてくださった」（著者：調寛雅 出版：教育社）

YouTube 再生リスト「昭和天皇」

[https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML41\\_7ZLLXFxWXyxDWeawDZO](https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML41_7ZLLXFxWXyxDWeawDZO)

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>